

土筆摘み媪はむかし語りをり

山田真砂年

〔俳壇〕五月号「光の中に」より

暖かい春が訪れ、日当たりのよい土手に出て一人の媪が土筆を摘んでいたのである。そこを通りかかった作者が「良い日和ですね」と声をかけると、媪は土筆を摘みながら昭和の時代のころの暮らしぶりについて懐かしく話を始めたのである。現在は土筆を摘んで食べる人はほとんどいないが、昔は貴重な食べ物であったことや、そのほか、野原の草木も食用にしたことなどを語ってくれたのではないだろうか。